

BOOK REVIEW

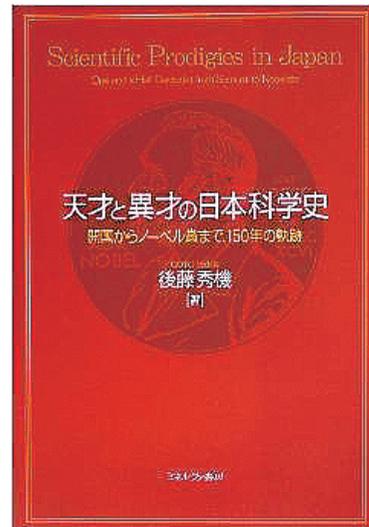
『天才と異才の日本科学史 開国からノーベル賞まで、150年の軌跡』* 後藤秀機著（ミネルヴァ書房）

毛利 聡（川崎医科大学 生理学 1 循環生理学者）

著者は原子核工学を学んだ後に神経生理学を専攻するという異色と言える経歴の持ち主である。本書は我が国の開国から現在に至るまでの科学史について、ノーベル賞受賞者周辺を対象として広範な領域にわたる科学者を個人的なエピソードを交えて興味深く紹介している。特に量子力学や原子力関係の記述では詳細且つ的を射た注釈によって、門外漢でも研究の本質を垣間見ることにより楽しく読み進めることが出来た。

冒頭には豊前中津出身の福沢諭吉を据え、既存の価値観に囚われずに思考する科学的態度の重要性を世に示した功績を「サイエンスプロデューサー諭吉」と表現し、150年後の日本が少なからぬノーベル賞を受賞する素地を築いたとしている。中津は近年「黒田官兵衛」で有名になったが、心臓研究の分野では房室結節を発見した田原淳（たわらすなお）の出身地でもある。科学の発展には歴史や文化が大きく関与しており、当時の中津にも科学と相性の良い何かがあったのであろうか。

続いて明治時代の黎明期に実学としての科学が国家戦略として取り入れられていった様子が描かれており、長岡半太郎あたりから基礎物理学の流れが生じて湯川秀樹、朝永伸一郎、南部陽一郎、小林誠、益川敏英と展開していく。長岡は父親に漢学を厳しく叩き込まれており、東大に入って「自分たちと全く別種にさえ見える毛唐の頭の中が自分たちと同じとは全く思えない。万葉の昔から大和心を謳ってきた自分たちに、ギリシャ時代から築き上げられて来た物理学を研究するだけの能力があるのか。」との疑問にとらわれたとのことであるが、このような文化的背景・感覚も実学から離れ基礎物理学の世界で独創的な業績を残すためには重要だったのかもしれない。また、本書にはユニークな生理学者のエピソードも数多く紹介され



ているが、本誌の読者には比較的馴染みがあると思われるので、割愛させて頂く。

我が国の代表的科学者を紹介するという趣旨から、やや羅列的な感否めないが、その中にも世代を超えて受け継がれる科学者の精神や、ノーベル賞として大輪の花を咲かせた研究成果の根となる部分にも意識的に光が当てられていると思う。終盤は福島原発事故の分析に多くが費やされている。物理学を理解することは出来ても、西洋の思想や哲学、道徳や宗教を真に理解出来ないことが原因という考えには必ずしも与せないが、学問に対する真摯な想いからの発露であると感じられる。

*本書は2014年6月、第62回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞しました。